



6月を振り返って

6月の教職課程センターは、集団討論演習に力を入れてきました。集団討論は、東京都をはじめいくつかの自治体では採用選考から除外されていますが、まだまだ重要視している自治体もあります。しっかりと準備・対策をしておくことが大切です。相手を否定しない、相手の長所を認めながら、自分の色も加えて、課題解決のために、参加者全員で力を合わせてゴールを目指すことが、何より大切です。今回の演習でもその点を意識して参加できたことと思います。これだけの準備をして臨んでいる人は少ないので、ぜひ皆さんは自信をもって本番の選考に臨んでほしいと思います。

7月の予定

9日にはよいよ採用選考の一次選考が予定されています。直前の今は、一次選考の準備に集中してください。以前に比べて一次選考のハードルは下がっているとはいえ、手を抜いてはだめです。特に専門教養は、教員としての専門性に直結する内容なので、しっかりと身につけておきましょう。自治体ごとの出題傾向もあるようなので、過去問を繰り返し解いて、得意な領域を広げておきましょう。ここからさらに本番の選考に向けて、ギアを一段上げていきましょう。

採用選考直前の取り組み

今月は10日から31日まで、個人面接の最終演習を実施します。ここでは、各自の願いや思いを「ストーリー」に仕上げ、面接官にアピールできるようになるために、徹底して実施していきます。詳細については個別にお話いたしますが、個人面接において一番面接官の心に刺さる内容は、あなたが「逆境を克服して成果を上げた」というストーリーです。逆境に負けずに這い上がってきたというストーリーには人を感動させる力があります。あなただけにしか語れない「ヒーローズジャーニー」を作り上げましょう。もう一つ大切なのは、「好感度」です。面接での合否はこの「好感度」で決まるといってもいいでしょう。2次選考での個人面接は、受験者の知識や経験を確認する場ではありません。それらは面接票に記載しておけば十分です。面接官は短い面接での問答を通して、受験者の「魅力」や「可能性」を見出そうとしています。言い換えれば、面接官が合格させたい！と感じるのは、「この人となら一緒に職場で働いてみたい！」あるいは「この人なら子どもたちの前に立ってほしい！」という印象を持った時です。面接官にそんな印象を残すために、皆さんが面接に臨む場面で求められているのは、決して知識を述べることではありません。また教科書に書いてあるような正解を述べることでもありません。面接は試験ではないのです。大切なのは「私にはこんな魅力があって、子どもたちにはこんなメッセージを伝えたいと思います」というベースに基づいて、あなたにしか語れない夢や希望、理想の学校像を語ることです。面接官とこんなキャッチボールができるとうれしいですね。

面接官：「今、学校にはAという課題があります。あなたはこの課題にどう取り組んでいくつもりですか？」

受験者：「はい、私が教員になったら、Bという方策を実行することで、この課題を解決していきます」

面接官：「なぜBに取り組もうと思うのですか？」

受験者：「はい、Bを行うことで子どもたちがCという力を身につけることができると考えているからです」

面接官：「Cが身につくとどのように変わるのですか？」

受験者：「はいCが身につくことで、学校全体がDという状態になることが期待できます。これが私が考える理想の学校像です。」 ※（A～Dにいろいろ当てはめながら考えてみましょう！）

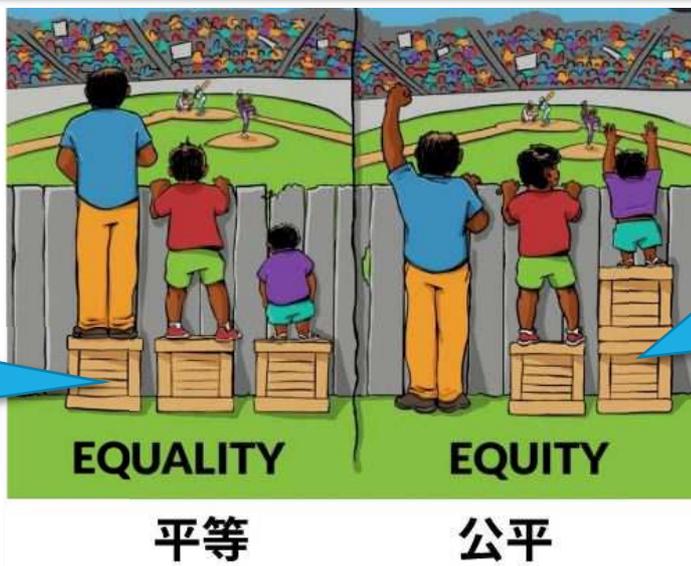
論文作成で気をつけたい日本語の表現

日本語表現の内、特に「書き言葉」の場合に「漢字表記」か「ひらがな表記」か迷う場合があります。しかも漢字で表記した場合とひらがなで表記した場合で、意味が違う表現も多いのです。今回はそんな表記の違いによる意味の違いについてまとめてみました。論文を作成する際も、表記には十分注意してください。

- ① 下さい ⇒ 物などが欲しいとき (give) 例：ファイルを下さい。資料を下さい。
ください ⇒ お願いするとき (please) 例：ファイルを取ってください。資料をご覧ください。
- ② 頂く ⇒ 食べる。もらう。(eat, get) 例：食事を頂く。資料を頂く。
いただく ⇒ ～してもらう。(補助) 例：資料をごらんいただく。学校にお越しいただく。
- ③ 所 ⇒ 場所を表すとき 例：〇〇市という所。ドアの所まで歩く。
ところ ⇒ 動作の状態を表すとき 例：ご多用のところ、恐れ入ります。私が訪問したところ、校長が
- ④ 時 ⇒ 時点や時刻を強調するとき (when) 例：出勤した時には～ その時すでに～
とき ⇒ 仮定的な状況を表すとき (if) 例：頭が痛いときには～ 私が休んだときには～
- ⑤ 見る ⇒ 目で視認するとき (watch, look, see) 例：SNS の投稿を見る。
みる ⇒ 実施してみるととき (try) 例：SNS の投稿を保存してみる。
- ⑥ 行く ⇒ 移動や到達を示す (go) 例：学校に行く。遊びに行く。
いく ⇒ 動作・状態が継続するとき (keep on) 例：フォロワー数が増加していく。
- ⑦ 事 ⇒ 具体的な事態を指すとき 例：大変な事になる。考え事をする
こと ⇒ 抽象的な内容の場合 例：聞いたことがある。運動することになっている。
- ⑧ 物 ⇒ 目に見える物体を指すとき 例：棚に置いてある物。物があふれている現代。
もの ⇒ 抽象的な事柄を指すとき 例：経験がものをいう。いざとなると冷酷なものだ。
- ⑨ 言う ⇒ 喋る・話すという意味を含むとき 例：言うまでもなく、言うとおりにする
いう ⇒ 喋る・話すという意味を含まないとき 例：教師という職業。リンゴという果物。
- ⑩ 致します ⇒ 「する」の丁寧語 例：私の不徳の致すところです。こちらで準備致します。
いたします ⇒ 他の動詞を補助するとき 例：お願いいたします。ご迷惑をおかけいたします。

番外編

平等 ⇒ 差別や偏りなく一様に扱う (equality)



公平 ⇒ 能力や状況の差に応じて皆が不利益にならないように適切に扱う (equity)

平等

公平

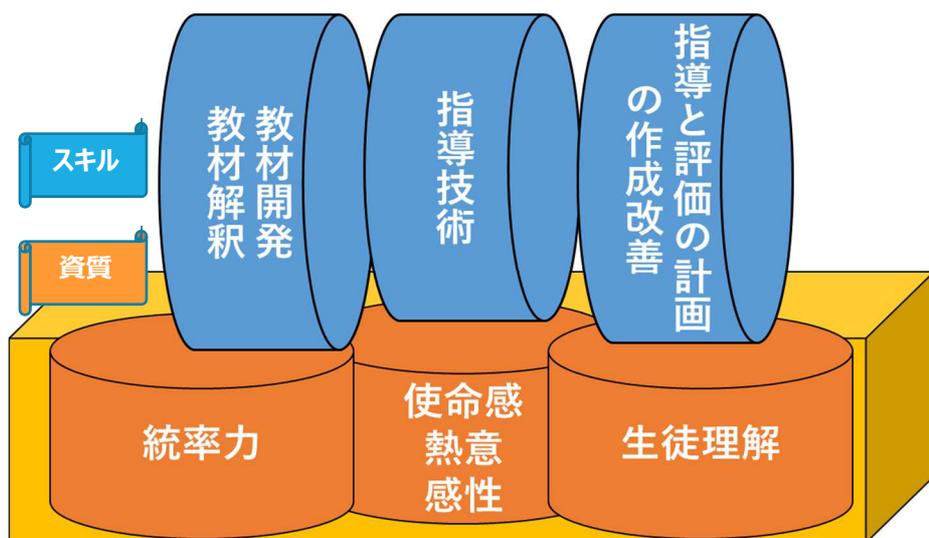
教職 TOPICS No.16 授業評価について その1

授業は一度やったら終わり、というものではありません。毎回の授業が終わるたびに、自分で振り返りをしながら、よりよい授業へと改善させていく必要があります。「完璧な授業」というものは存在しません。永久に完成しないものなのかもしれません。だからこそ、毎回の授業を振り返り、「どうすれば子どもたちのよりよい学びに近づけるのか」「どうすれば、より深い理解につながられるのか」等、常に改善点を探し続ける営みが必要なのです。この「常に改善点を探し続ける営み」のことを、私たちは「授業評価」と呼んでいます。

授業力の6要素

東京都教育委員会では「授業力」を6つの要素に分けて説明しています。以下の図に示します。

必要な【資質】と身に着けたい【スキル】



「統率力」「使命感・熱意・感性」「生徒理解」は、教師に求められる【資質】です。この3つがバランスよく備わっていることが期待されます。

これらの資質の上に、教師が自分で獲得しながら身に着けていく【スキル】が「教材開発・教材解釈」「指導技術」「指導と評価の計画の

作成改善」になります。こちらも3要素全て重要ですが、いっぺんに身に着けようとしても、そう簡単に獲得できるものでもありません。「今年は教材開発に力を入れてみようか」等毎年年度当初に年間計画を立てる際に、その年に自分が取り組む重点目標を設定して、研修を進めていくと良いと思います。そして数年後にはすべての要素が高いレベルで獲得できている状態が理想です。

教材開発・教材解釈とは
教科や関連する学問に関する
深い見識

指導技術とは
「わかる授業」「もっと学習したくなる授業」
を実現する技能

指導と評価の計画の作成・改善とは
常によりよい授業を求めていく改善の意欲

生徒理解とは
一人ひとりの生徒を
大切に考える愛情

統率力とは
生徒の集団をまとめ、リードする力
生徒を惹きつける力（あこがれ）

使命感・熱意・感性とは
豊かな感性を持ち、教員の職責を
自覚し、困難な状況に挑む姿勢

シリーズ【私が出会った忘れられない生徒たち】

長年教師をやっていると、一生忘れられない生徒との出会いもあります。今回は、【私が出会った忘れられない生徒たち】について回想を載せたいと思います。最初にご紹介するのは、「相手を思いやる気持ちが半端なかった生徒」です。どんな生徒だったかと言うと……

私が新卒で赴任した学校で、初めて中学校 1 年生の担任を持った時に会った生徒で、一生忘れることができない生徒がいました。

当時欠席連絡は保護者が生徒手帳に欠席の理由を書いて、友人に託して担任に届けるというやり方でした。ある日の朝学活で、私は A 子の生徒手帳を彼女の友人から受け取りました。「風邪気味で体調不良なので今日は休ませます」と書いてあり、A 子が欠席するのを知りました。本来であれば、帰りの学活時に、その手帳を友人に返し「A 子の家に届けてね」と頼まなければいけないのに、その日私は A 子の生徒手帳のことをすっかり忘れて、生徒たちを下校させてしまいました。放課後も部活指導や翌日の授業準備に追われて、A 子の生徒手帳が、職員室の机の上に置きっぱなしになっていることを忘れていたのです。翌日まだ体調不良ながら登校した A 子は、朝学活で「先生、今日はまだ体調が戻らないので、体育の授業は見学させてください」と申し出ました。そんな A 子に対し私は「見学したいならちゃんと生徒手帳に書いてこなきゃダメじゃないか」と指導してしまったのです。ひどい担任ですよ。自分が A 子の生徒手帳を返し忘れていたのに「生徒手帳に書いてこい」と言ってしまったのですから……。しばらくの沈黙の後、A 子が私に言った言葉が、今でも私の心に刺さっています。私の言葉を聞いてしばらく下を向いていた A 子は顔を上げると、目に涙を浮かべていました。その時に、まだ自分の犯した罪に気づいていない私は驚き「えっ！何も泣くことはないだろう」と思ったのです。

A 子は涙をぼろぼろこぼしながら「先生ごめんなさい。私は時々訳もなく泣きたくなくなってしまうことがあるのです」と言って席に戻っていったのです。鈍感な私はまだ「なんで…?」と状況を理解できていませんでした。そして朝学活が終わって、職員室に戻り、自分の机の上に A 子の生徒手帳があることに気づいた私は、その時に初めて自分が犯した罪に気づいたのです。私は速攻で教室まで駆け戻り（おそらく人生で最高のスピードだったと思う）A 子に謝りました。生徒たちは全員「???」でしたが、私はひたすら A 子に謝り続けました。

A 子は気持ちの優しい子でした。だから「きっと私が本当のことを言ったら先生が傷つくんじゃないか」と思って、とっさに「訳もなく泣きたくなくなってしまう」と言ったのでしょう。私はこんなにまで相手を傷つけないように慮る（おもんばかり）人物には、その後の人生で出会ったことはありません。A 子はいったいどうやってそのような究極の思いやりの心を身につけたのでしょうか？今となっては知る術もありませんが、私は A 子から「真に相手を思いやる気持ち」を学んだのでした。（このシリーズは不定期に掲載していこうと思います）

